

## おひさま保育室

#受容的・応答的 #見守る保育  
#0・1・2歳児 #小規模保育室

### 言葉にならない 子どもの意志を、 信じて見届ける

#### 子どもの意志の「気配」に 目を凝らして

家庭的保育事業から始まり、小規模保育室となつて2021年で10年目となるおひさま保育室。0・1・2歳児を見てきて常々感じるのは、3・4・5歳児のとはまた異なる保育のあり方だといいます。

「まだ言葉の出ない、寝返り前の子どもでも、意志がはっきりとある。そして、それに対して私たちが応えようとしていることにも気づいている。だから、見えづらい子どもたちの主張をしつかりキャッチすること、

子どもがやってみようとするのを信じて見守る。それが自信につながる！

子どもの意志や感情をしつかり捉えサポート。それが私たちの使命！



代表  
和田優子さん



主任  
横田美喜さん

#### DATA

##### 取材

##### おひさま保育室（東京都）

0・1・2歳児が通う小規模保育室。保育室は、閑静な住宅街の中にある庭付きの一軒家。施設というよりも、親戚の家でくつろぐような家庭的環境を特徴としている。特に、緑豊かな庭は大人の目が届く適度な広さがあり、水あそびやどろんこあそび、自然物にふれるなど、好きなあそびにことん打ち込む子どもたちの姿がある。



お茶、  
おいしいね！

1、2歳児は異年齢で過ごすことが多く、子ども同士のかかわりも深い。



園庭というより、「お庭」と呼ぶのがふさわしい親密な空間。0・1・2歳児にとっては、発見と驚きの空間でもある。

そしてサポートすること。これが、私たちがやるべき第一のこと」と代表の和田さん。

そのためには、保育者が注意深く子どもの思いを読み取ることを、そして、子ども自身がどぶん意志を表現できることが大事だと考えています。

「子どもの肩がピクリと動いた。それだけで『あ、いま満足したんだな』と分かる。そんな『気配』を見落とさないように、できるだけ発け目を凝らして、すてきな発見をしたときには『ほら、あそこ、見て！』とほかの保育者に合図を送り合っています」と主任の横田さん。



「私にはやりたいことがあるの!」。キラリとした表情で帽子をかぶり、お庭に向かう。

#### 「私も見ているよ」のアイコンタクト

では、気配を察したあとは……、先取りしてやって見せたり



ていきます。「自分のやっていることが認められている、という思いが、子ども

もに安心感と自信を与え、欲求や思いをしつかりと主張することにつながるのではないのでしょうか。成長を願う大人のまなざしこそが、子どもの自己肯定感を高めると信じています」と横田さんも語ります。

#### 「コロナ禍の影響は……？」

コロナ禍で0・1・2歳児保育をするのに難しいのが、人と人との距離を取ること。手洗い、消毒などの衛生管理を徹底し、少人数でなるべく分散して保育を行うようにしましたが、保育者と子ども、子ども同士のかかわりについては、以前と変わらず続いています。

保育者のマスク着用についても、0・1・2歳児にとっては人の表情を見ながらのコミュニケーションが欠かせず、口元が見えないことで、子どもの言語の発達に壁をつくることも懸念し、食事以外は常用しないことに。人の命を預かることの重さを感じつつ、子どもたちの成長のために何を優先するのかを改めて考える機会になったそう。

# 生きる力って？

お昼になり、1歳児たちは部屋へ。残った2歳児は、ここぞとばかりにダイナミックなあそびを開始。満足した頃、保育者が窓を開けておいしい匂いを届けると、自ら昼食に向かった。



言います。

だからこそ、保育者も日々「信じる」ことの積み重ね。ある日、食事の時間に何度もおかわりをする1歳児がいました。お昼寝の時間も迫る中、5回くらいおかわりに応じたところで、その子が手をパチンと合わせ、自分から「ごちそうさま」の意志を伝えたのです。保育者が先に「もうごちそうさまね」と急ぐことはしません。本人が「満腹」に気づくまで待つ……、これがその子を「信じる」ことです。

## 人は人の中で生きてこそ 生きる力がみなぎる

一方、和田さんは「他者とともに生きることも大事」と言います。「なんでも一人でできる、と思ってしまうのは傲慢。人は、他者に頼ったり頼られたりして生きていくもの。他者とかかわりを本格的に身につけていくのは、3歳を過ぎてからにはなりますが、その萌芽を2歳

並ぶ椅子を電車に見立てて「ガタンゴトン」。すると後ろに別の子がやってきて、車掌さんに、「一緒」を楽しむ。



目撃!

## やり遂げる！ 子どもたち and 見守る！ 大人

やりたいことに一直線！ 子どもたちと、それを見守る 大人の姿を追いました。



みまもり!

そーっと近寄ったら、小さな声で「ブルルン、ブルルン」と。もしかして清掃車になりきっている？ などと思索していると、私の方をチラリ。何も言わず、「いいね！」の視線を送ると、満足したのか違うあそびに向かいました。読み取りの間違いないで、数知れず。それでも、彼の行動はしっかり見守ります。

なぜか、あそびの道具を次々と運ぶ子を発見!

たくさん集まった道具たち。



道具のある方に回り込み、最終確認。

庭の隅っこに次々と道具を置く。

みまもり!

一つ一つのあそびや生活を、子ども自身が実感を持って味わえるように、促しすぎず、けれども次にすることがイメージできるようなヒントを出しながら、子どもを見守っていきます。



満腹で気持ちよくなったら、ぬいぐるみを持って、自分から布団へ。

たくさんあそんで満足した後には、食事で満腹感を味わう。



魚の形のおもちゃを用意し、「お魚、泳ぐかな？」と、ほんの少しあそびの「提案」。

流れる魚にたちまち夢中！ 魚の行き着く先まで追いかける。



## 人間の「生きる力」を 保育現場で学び続ける

日々、自分で発見して実感していく子どもたちと過ごしていると、「人間って、こんなに力があるんだ」と保育者自身が気づかされるのだから。「0歳児だってそれぞれ個性が際立つし、一人として同じ子はいません。子どもたちの組み合わせもその年一回きり。そのときうまくいった方法が、次も通用するとは限りません。だから学ぶことがいっぱい。子どもも大人も相互に育ち合う、それが園現場ではないでしょうか。そういう意味では、私たち自身が、子どもから「生きる力」を学んでいるのかもしれないね。」

自分を信じ 他者を信じる

(和田優子さん 横田美喜さん)

